

オートラジオグラフィに供した。〔成績〕患者血清と¹²⁵I-インスリンの結合は、71.9%と高率で、非標識のヒトおよびブタインスリンの添加により用量反的に結合抑制を認めた。本結合は、IgGでκ優位の分画に認められた。IgGのヒトインスリンに対する親和定数は $3.6 \times 10^7/M$ 、結合能は $15,930 \mu U/ml$ であった。また患者血清と¹²⁵I-インスリンの結合能はthiopronin服用中止後漸減し、6か月で消失した。〔結論ならびに考案〕本患者のインスリン抗体は、自己抗体と考えられ、インスリン自己免疫症候群と診断された。自己抗体産生の原因にS-H基を有する薬物が関与するとの報告があり、本症例もthioproninの服用中止後抗体価の減少がみられ、本薬物の服用が関与したものと推察される。

42. 種々疾患における赤血球膜 Na-K ATPase の測定

小笠原秀則 堀本 昌映 西川 光重
 稲田 満夫 (関西医大・二内)

〔目的〕甲状腺機能異常症において³H-ouabain最大結合量より血球膜 Na-K ATPase 量を求め、さらに⁸⁶Rb uptakeを指標として陽イオン輸送能を測定し、両者の関係を検討した。さらに、これらの指標を非甲状腺疾患でも測定し、その代謝状態の推定を試みた。

〔対象と方法〕正常者(N)20名、甲状腺機能亢進症(Hyper)22例、機能低下症(Hypo)8例、非甲状腺疾患(NTI)として、悪性腫瘍患者(Cancer)12例、維持透析中の慢性腎不全患者(HD)19例で、赤血球膜(E)本酵素量を測定した。また、これらのうち一部症例で、単核球膜(M)本酵素量およびEおよびMの⁸⁶Rb輸送能を測定した。Na-K ATPase量(B)は、³H-ouabain binding assayで求めた。⁸⁶Rb輸送能(U)は、血球と⁸⁶RbClを1時間インキュベーションし、この間に取り込まれた放射活性より求めた。

〔結果〕EにおけるBは、Nに比しHyperで有意に低値を、HypoおよびNTIで有意に高値を示した。一方、MにおけるBは、その変動の方向はEの場合と同様であるが、各群間に差を認めなかった。Uは、EおよびMで各群間で差を認めなかった。しかし、U/BはEにおいて、Nに比しHyperで有意に高値を示し、甲状腺ホルモン濃度と正相関を示した。他方、CancerおよびHDのU/BはNと差がなかった。

〔結論〕MにおけるBは、酵素の崩壊のみでなく産生

の変化によっても規定され、末梢代謝状態を知るにはEの方が適していると考えられた。NTIでは、Eでの本酵素の崩壊が遅延しているが、U/Bは正常に保たれていることが示唆された。

43. Prolifigen TPA キット“第一”IIを用いた泌尿器科領域における尿中 TPA 測定

吉田 全範 土居 淳 (泉佐野病院・泌)
 鳥住 和民 間島 宏文 (和歌山医大・放)

最近開発された、ビーズ法を用いたTPAの簡易測定キットを用いて、尿中TPAの正常値、および、膀胱癌をはじめとするいくつかの泌尿器科疾患について、陽性率を検討した。

〔方法〕尿検体は、採取後直ちに $3,000 \text{ rpm} \times 10 \text{ min}$ の遠沈後、その上清をキット添付希釈液で2倍希釈し、2時間の室温放置後に測定されるか、あるいは測定までの間凍結保存(-20°C)された。

〔対象〕正常コントロールとして、24時間尿は、和歌山成人病センターで健康診断を受けた者のうち、諸検査で異常を認めなかった41名から、そして、随時尿は健全な医療関係者93名から採取した。疾患群として膀胱癌24例から、随時尿19例、24時間尿22例を採取し、その他、膀胱炎、前立腺炎、尿路結石症、前立腺肥大症、特発性腎出血、神経因性膀胱からは随時尿を採取した。

〔結果〕24時間尿と随時尿の間には、尿中TPA測定値に有意の相関は認められなかった。膀胱癌においては、随時尿で78.9%、24時間尿で72.7%の陽性率が得られ、腫瘍マーカーとしての意義が認められた。しかしながら、良性疾患においても、膀胱炎や、尿路結石症などのような、尿路の炎症を伴う場合に、30%近い偽陽性率が認められた。

44. 甲状腺原発悪性リンパ腫の治療経過観察における⁶⁷Ga SPECTの有用性

河中 正裕 石村 順治 末廣美津子
 福地 稔 (兵庫医大・核)

症例：58歳主婦。昭和47年から慢性甲状腺炎の診断の下、甲状腺ホルモン剤の投与を受けていた。昭和62年8月悪性リンパ腫を発症し、当科へ紹介受診した。来院